

スキンシップを伴う集団遊びに見られる自然発生的身体接触の機能

金子 藍子

愛知教育大学大学院教育学研究科 発達教育科学専攻幼児教育領域

Spontaneous Physical Contact Function found in Group Play with Skinship

Aiko KANEKO

Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. 問題の所在と目的

従来の研究より、身体接触は人との繋がりを広げるきっかけとして有効的であり、対人関係を深める機能があることが明らかにされている。曹ら¹⁾は身体接触をとる相手を親、家族、親友、知り合い等に区別し、親密度や関係性ごとにスキンシップの程度の許容度を調査及び分析し、相手との関係が親密なほど、物理的コミュニケーション距離は近くスキンシップ許容度は広いと明らかにしている。また會田ら²⁾は、養護学級において教師が「スキンシップ・タッチ」という非言語的コミュニケーションを意図的に、積極的にとることの意味を検証した。その結果、児童からの発話が増える、表情が豊かになる等の心身への安寧の効果があることを示し「スキンシップ・タッチ」が、児童生徒が学校生活を楽しく過ごすための教育的意味を成すと説いた。塚崎・無藤³⁾は3歳児の仲間関係における身体接触を事例検討し、3歳児においてはことばで仲間入りするよりも身体接触の方が有効であり、全身性のコミュニケーションであると述べ、身体接触をとることの重要性を示唆した。しかし現段階では、異年齢の子どもがとる身体接触や、子ども同士の身体接触のプロセスや役割についての検討は不十分である。そのため筆者は身体接触の年齢ごとの特徴ではなく、遊びのなかで子ども同士が自然発生的に行う身体接触に注目した。

子どもたちは日常の様々な場面で多くの身体接触をとっている。子どもたちがとる身体接触は意識的なものもあるが、多くは遊びや会話の中できっと自然に、無意識のうちにされると考えられる。藤田⁴⁾は、身体知の知見から幼児の身体接触について年齢ごとの特徴を分析し、5歳児は身体接触を巧みに道具的・手段的に用いているが、あくまで暗黙の中で用いられてい

ることを明らかにした。日々の保育の中でも、子どもたちが巧みに身体接触を取り合う場面によく遭遇する。子どもたちが友人や保育者とコミュニケーションとして身体接触をとる姿はとても楽しそうで、身体接触をとることで遊びがより豊かに発展していくように見受けられる。しかし、なかには内気で自ら友達と関わることに苦手意識を感じている子どももいる。友だちと関わることに苦手意識を持つ内気な子どもにとって身体接触をとる、すなわち人に“触れる”という行為はハードルが高く、容易ではないと考えられる。杉村、桐山ら⁵⁾の研究においては、内気な子どもに対しての保育者の対応として、いい人間関係を作り、主体的な動きを支持し、見守るという受容的な方法での関わり方や、友だちと遊ばせたり、他の子と同じ行動をさせたりするという意図的な援助が行われていると言及している。そのなかで“友人関係のきっかけをつくってあげる”というという指導方法があげられているように、内気な子どもにとっては、友達と関わるきっかけを自ら見つけることができず、受け身になっていることも多い。そのため、保育者の意図的な援助としてねらいを考慮した保育環境の設定はとても重要だと考える。

保育者は、子どもたちが毎日園生活をより豊かに送れるよう、子どもたちの姿や発達に寄り添った保育環境を設定している。山田⁶⁾は、環境設定の意義を探るためシャボン玉お絵描きという同じ活動を、気づきをねらいとして描画方法は伝ええない環境設定型と、導入時に描画方法を説明するレクチャー型で実践し、子どもの様子や活動の内容を比較し検討した。その結果、レクチャー型は想定した通りの活動、作品になったのに対し、環境設定型は子どもが自由に表現し、主体的に取り組み、遊びが魅力的に展開したと述べている。環境設定を工夫することで子どもの気づきを十分に促す自発性を尊重することができ、保育者の想定を超え

た表現に出会う機会を作り出すことができると示唆している。また、山田⁷⁾は、保育空間の設定に着目し、こぢんまりと個々が絵本を読む空間だった絵本コーナーを、日々子どもたちの絵本読み活動の姿からより子どもたちが興味を示しやすいように空間設計を変化させ、友人とコミュニケーションがとれるより豊かな場所へと変容させた。このように、保育者は幼児が自己を発揮し、他者とのかかわりを深め、主体的な活動を行うことができるよう日々アプローチしている。筆者は、内気で友達との関わりに苦手意識がある子どもたちの対人関係の困難さを解消するために、遊びの中でごく自然にかつ気軽にスキンシップをとることのできる環境が、気の合う友達を見つけたり、自ら友達に関わったりするきっかけとして有効ではないかと考える。日常の保育の中で、友だちに肩をたたいて気軽に話しかけたり、手を繋いで誘ったりすることに困難さを感じている子どもでも、遊びの一環として友だちとスキンシップをとり、“触れる”ということのハードルを下げることで、身体接触をとることに対する困難さが軽減し、仲間関係を築くひとつのきっかけづくりの場として身体接触の役割が見出せるのではないだろうか。そこで自然にスキンシップをとることの効果を探るために、実践研究としてスキンシップを多く取り入れた集団遊びを実施する。本研究では、スキンシップを多く取り入れた集団遊びの中で、子どもたちがどのような身体接触をとるのか、身体接触の種類を明らかにし、そこから身体接触の持つ意味及び役割を探ることを目的とする。

II. 研究方法

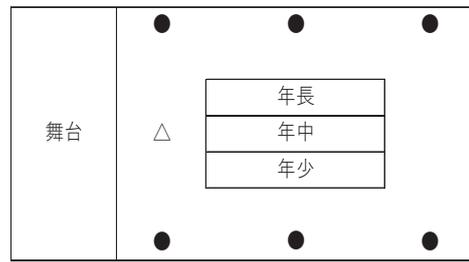
(1) 調査対象・期間

2019年7月8日、12日、16日にA市の私立幼稚園に在籍する幼児300名程(年少・年中・年長各3クラス)に集団遊びを行った。日程ごとに、年少・年中・年長各1クラスの計3クラスから成る、ひとつの異年齢集団を形成した。事前に担任保育者にアンケートを実施し、普段から集団遊びに積極的に参加する子ども1名と、参加に対して消極的だと感じられる子ども1名も選出してもらい、対象児年少児6名、年中児6名、年長児6名の計18名をビデオカメラにより撮影した。

(2) 保育実践

スキンシップを取り入れた集団遊びを実施し、その様子をビデオカメラにより記録した。集団遊びの内容は、子どもたちが楽しみながら自然にスキンシップをとることができる内容を、実施する保育者と相談して決定した。実施の際は、子どもたちが聞き慣れた、動

きやすい曲調の音楽を使用した。保育環境と集団遊びの内容をそれぞれ図1、表1に示す。



△…保育者

●…ビデオ

図1 保育環境(遊戯室)

表1 集団遊びの内容

遊び	くっつき虫はなれ虫	アンパンマン	まねっこ動物
実施時間	10分	10分	20分
人数	二人組	二人組	近くにいた友達 (大人数でも少人数でも可)
内容	「くっつき虫○(体の部位)」は言われた部位をくっつける「離れ虫○○(体の部位)」は言われた部位を離す	アンパンマン→手を繋ぐ、ドキンちゃん→電車がキャラクターにより動作を決め、保育者のいうキャラクターの動作を思い出し行う	カエル、うさぎなど保育者が前方のホワイトボードに示した動物になりきり、遊戯室内を自由に動く。なっている音楽が止まったら近くにいた友達と円になって手を繋ぎ、ハイタッチやおしりをくっつけるなどの身体接触をとる

(3) 分析方法

本研究で抽出する身体接触の対象は、保育者が集団遊びの一環として声かけ及び誘導したスキンシップを除き、集団遊びの最中に行われる自然発生的に生じたものとする。また、意図の有無にかかわらず、体の一部や身に着けているもの(靴下、衣服)等に触れた場合を、身体接触をとったと定義しそれらが行われた場面を撮影したデータより抽出する。抽出した場面から、身体接触を行う側の、表情・友達との物理的距離・発話の有無等を分析し、心情や意図を検討する。さらに身体接触を受ける側の反応・表情・身体接触後のやりとり等を分析及び検討することで、身体接触のパターンを明らかにする。塚崎、無藤³⁾は、3歳児における身体接触を、親和的・否定的・偶発的・中立的・不

明の5つに分類しているが、それを参考に、身体接触の場面のパターンを整理し、新たなカテゴリーに分ける。

(4)倫理的配慮

実施内容及び研究の趣旨を、全職員に対しては口頭で説明し、保護者に対しては手紙を配布し、許可を得て実施した。

Ⅲ.結果

身体接触が行われた場面を抽出したところ全部で167事例あった。場面のやりとりを整理した結果、身体接触が行われる前後のやりとりや受け手の反応が大きく異なることから以下のように定義をして身体接触を4つのグループに分けた。まず、身体接触が行われる直前に会話のやり取りや顔を見合わず等の存在の認識がある場合は相互的な身体接触、存在が認識できるようなやり取りがなく唐突な場合を一方的な身体接触とした。さらに、身体接触後の受け手の反応から親密さがみられる場合や会話や遊びに発展した場合は親和的な身体接触、受け手が無反応または嫌そうな反応をみせた場合は否定的な身体接触とした。それぞれの事例数は図2の通りである。

	親和的		
相互的	117	38	一方的
	2	4	
	否定的		

図2 事例のグループ分け1

さらに身体接触の意味及び役割を細かく分析し、無意識のうちに触れた、何となく触れた等の意図がないと感じとれる7つの事例を除く全160事例を、甘え・好意、アピール、興味、遊び・ふざけ、意思・要求、援助・声かけ、攻撃の7つにカテゴリー分けをし、各事例数を示した(図3)。各カテゴリーの定義及び具体例は表2の通りである。

身体接触の意味や役割を探るという視点で子どもたちの行動を観察すると、全く同じ身体接触でも図2が示す4グループでは、異なる展開をすることが明らかになった。例えば同じ“抱きつく”という身体接触であっても相互的かつ親和的な身体接触はその後遊びや会話へと発展し、楽し気な子どもたちの姿が観察された。しかし、一方的かつ否定的である場合には会話さえ発生しない場合や、抱きついた相手に自分の存在を

認識すらされない場合もみられた。一方そのなかでも、一方的かつ否定的な身体接触でも、それを繰り返すうちに相手が親和的な反応をみせたことから会話やコミュニケーションへと展開していく事例もみられた。身体接触がコミュニケーションの始まるきっかけとなっているか、その後展開をするか否か、事例から原因を考察し、身体接触の持つ役割及び意味を探る。

	親和的		
相互的	甘え・好意(50)	甘え・好意(13)	一方的
	アピール(15)	アピール(12)	
	興味(5)	興味(6)	
	遊び・ふざけ(30)	遊び・ふざけ(3)	
	意思・要求(4)	意思・要求(1)	
	援助・声かけ(11)	援助・声かけ(3)	
	攻撃(2)	攻撃(0)	
	甘え・好意(0)	甘え・好意(0)	
	アピール(0)	アピール(0)	
	興味(0)	興味(0)	
遊び・ふざけ(0)	遊び・ふざけ(0)		
意思・要求(0)	意思・要求(0)		
援助・声かけ(1)	援助・声かけ(2)		
攻撃(1)	攻撃(0)		
	否定的		

図3 事例のグループ分け2

表2 カテゴリーの定義と具体例

カテゴリー	定義	具体例
甘え・好意	相手に対して愛情や信頼を示している。表情や振る舞いが慣れ親しんでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・体の一部（手・肩・おでこ等）を触りながら話をする ・抱きつく、抱き合う ・膝の上ののって話す ・頬にキスをする、頬に顔を近づける、頬をつつきあうなど ・手を繋いで歩く ・肩もみをする、肩を組む ・ハイタッチをする ・頭を撫でる ・くつつく、寄りかかる
アピール	自分の存在を相手に主張している。自己主張をしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・体（膝、肩、顔、髪の毛）を叩く ・衣類を引っ張る ・体の一部（頭、耳、肩、頬、背中）に触る ・わざとぶつかる ・抱きつく ・足を絡める ・体が触れ合うように座る
興味	相手の行動や身に着けているものに好奇心を惹かれたり、面白みを感じている。	<ul style="list-style-type: none"> ・身に着けているものに触れる ・体の一部に触る ・体が触れるよう接近し顔をのぞきこむ
遊び・ふざけ	ルールのある遊びを始める。楽しさやおかしさを共有し笑いあう。	<ul style="list-style-type: none"> ・抱き上げてまわる、抱っこしあう ・つきあう、くすぐる ・なべなべそこぬけ ・せっせっせーのよいよいよい ・尻でアタックする ・頭を軽くたたく ・体の同じ部位（頭、足、尻）をくっつけ遊ぶ ・相手の顔の近距離まで迫る
意志・要求	自らの意向を実現しようとする。自らの意向の実現を相手に求める。	<ul style="list-style-type: none"> ・行きたい方へと手を引っ張る ・狭いからつめてほしいと押す ・顔を見てほしい方向へと向ける
援助・声かけ	困っている他者に対し、教える、声をかける、導く等の配慮をする	<ul style="list-style-type: none"> ・手を引き誘導する ・謝罪をするときに肩に触れる ・間違いを伝えるために手を掴む
拒否	自分に向けられた願いや要求を拒み、断る。相手の行為又はそんざいそのものを嫌がる、拒絶する	<ul style="list-style-type: none"> ・手をふり払う ・肩をふり払う
攻撃	相手を物理的に攻める	<ul style="list-style-type: none"> ・パンチする ・押す

IV. 事例検討と考察

事例1 H：年中女児，A：年長女児

HとAは、学年は違うが習い事が同じという共通点があり、普段の遊びの姿からも仲の良さが伝わってくる。Hは友達が多く戸外遊びでは常に活発に遊んでいるが、時には遊びを中断してまでもAの姿を探し挨拶をしにいたり遊びに誘ったりするほどAのことを慕っている。Aも年下のHをととても可愛がっており、互いに好意を持っている様子が二人の姿から見受けられる。

集団遊びが始まり、二人は学年もクラスも異なるため別々のところに整列しており、互いの存在はこの時点では認識していない様子で、それぞれ近くにいる別の友達と会話をしていた。保育者が前に立ち、集団活動のルール説明が始まった。保育者が二人組になるように声をかけるとHはまわりを見渡しAを探す。Aを見つけると笑顔で一目散にHのもとへと走っていき、①走った勢いそのままAに抱きつく。AもHを見つけると笑顔を見せ抱きつき返す。<相互的一親和的—甘え・好意>②二人は抱き合ったままジャンプをしたり、互いの頬をつついたり楽し気に微笑みあう。保育者の話が始まって座るときも腕を絡ませたり、互いに寄りかかったり<相互的一親和的—甘え・好意>と、常に身体接触をとっている。手を繋ぐ、抱き合う、「ねえ」と肩をたたく等多くの身体接触を取りながら、二人は1時間近く行われた集団活動中離れることなく、常に一緒に行動していた。

また、二人は座って保育者の話を聞いている時に、目配せをして微笑みあったのちに③互いに肩に寄りかかったり、相手の手をマッサージするように触ったり、無言のまま身体接触を取り合う場面も多く見られた。<相互的一親和的—甘え・好意>

①の場面でHがAの胸に迷いなく豪快に飛び込んでいることからAのことを信じきっている強い信頼関係が見受けられた。HとAは1時間の集団活動中に身体接触を繰り返してはいたが、すべて相互的かつ親和的なものであり、一方的や否定的なものは一つもなかった。なおかつ、身体接触を会話や遊びのなかでどち

らからともなく互いに取り合っていることから、二人にとって身体接触はコミュニケーションの中でごく自然に、無意識のうちに行っているものであり、二人のコミュニケーションを楽しむうえで必要不可欠なものであることがわかる。また、③のように会話はなくても身体接触を取りながら微笑みあったり、無言で寄り添いあったりする姿から信頼関係が強い関係性にある二人にとって、身体接触は言葉や会話同様の作用を持っており、触ることによって心を通わせていることがわかる。身体接触を通してのコミュニケーションは必ずしも言葉や会話を伴うものではなく、信頼しあう関係の中に非言語的コミュニケーションとして成り立っていること明らかになった。

事例2 K：年少男児，Y：年中男児

KとYは他学年であるが普段から交流がある。一緒になって遊ぶというよりはKがYのことを慕い、一緒にいてもらっているというような関係である。Kは自分のペースや気分で遊ぶことを好むため、仲の良い朋たちはいないため、面倒見のよいYは普段からよくKのことを気にかけて、世話をしている。

集団遊びを行う遊戯室にYのクラスが先に到着し、Yは列の一番後ろでクラスの友人と座りながら話をしている。そこにKのクラスが遊戯室に到着し、Kは座っているYを見つけると、後方から近づきのYの隣に笑顔で座る。YはKの存在に気が付いていないのか何も反応せず変わらず前を向き、友人と話を続ける。

すると突然①KはYの足に自分の足を絡め、Yの顔を覗き込む。その時、前方では保育者が集団活動をもうじき始めるような雰囲気マイクを持ち立っていた。Yは普段から真面目な性格のため、友人との会話をすぐにやめ、保育者の話を聞く体勢を整えた。隣に座っているKの存在に気づき顔をちらっと確認するが、表情も変えず、反応しない。<一方的—否定的—アピール>すると、②Kはポケットからティッシュを取り出しYの顔を見ながらべしべしとティッシュを数回当てる。Yは少しだけ迷惑そうな表情をみせるものの、反応せずにそのまま前を向いて座っている。<一方的—否定的—アピール>Kは③ティッシュを顔に当てるアピールをしばらく続ける。する

と、YはKのティッシュを持っている手のひらに向かって自分の顔を押し付けるようにして笑顔をみせ遊びだした。KはやっとYが反応したため笑顔をみせ、満足そうにアピールをやめる。互いに笑顔で数秒顔を見あう<相互的一親和的—アピール>が、集団活動が始まったため、Yはすぐに保育者の方を向き、話を聞く。Yの隣に座ってからずっと体ごとYの方を向いていたKもようやく前を向き保育者の話を聞く。二人はその後も体が触れ合った状態で隣に座ったままだった。

①②の身体接触でYがKのアピールに対して反応しなかったのは、一方的で唐突だったのはもちろん、集団活動がちょうど開始する場面であり、遊ぶ時間ではないと判断したからであると考えられる。しかし、KはYに対してアピールを続ける。Kのアピールを続ける姿は、反応はしないが嫌がらないYに対して甘えているように見受けられる。KはYが反応しなくてもどこか満足げでYに触っているだけで安心しているように感じられる。さらにYの表情や姿からも、反応はせずとも身体接触を受け入れる優しさや親切みがみえた。身体接触の 카테고리 だけみると一方的かつ否定的な身体接触だが、KとYの間には日常で築いた信頼関係があり二人だけの空間を共有して、身体接触を行うことで暗黙のコミュニケーションをとっていることがわかった。身体接触は、言葉を用いなくとも安心する空間を共有するコミュニケーションとしての役割があることが示された。

また、①②のアピールには反応しなかったYが、繰り返されるアピールにより③で反応を示した原因は、普段から自分を慕うKを無視し続けることができなかったからであると考えられる。③でのYの反応は、仕方なく振り向きほほ笑んだように見受けられた。今回の事例では、保育者の話がすぐに始まり、静かにしなければいけない状況だったため2人は微笑みあうだけだった。しかし、状況を見ながらもKの気持ちに応えたYの姿や、Yの反応から状況を把握し微笑みあうだけで満足し身体接触をやめたKの姿から、二人の間には普段の強い信頼関係が感じられた。KとYの関係性から、仮に自由に話をしたり遊びを始めたりにできるような状況であれば身体接触をきっかけに、遊びや会話に発展していた可能性が高いと考えられる。身体接触が遊びや会話を始める有効なきっかけ作りになるか否かは普段の信頼関係、仲間関係が大きく影響していると考えられる。

事例3 **K**：年長男児，**S**：年長男児

KとSは普段から常に一緒に遊んでいて特別仲がいいという関係ではなく、クラスや園庭ですれ違うことがあれば互いにちょっかいをかけあい、笑いあうような関係である。特にSは特定の仲の良い友達を作らず、その時にやりたい遊びがあれば話をしたことの無い子どもにも「入れて」と言い、自由に遊んでいる。KとSは同じクラスでたまたま隣同士に座り、前方で話をしている保育者の方を向いているが互いの存在は意識していない。偶然Kが横を向くとSの姿が目に入り、Sと目が一瞬合うが、Sはすぐに目をそらす。するとKは①突然隣に座るSの頬を両手でべしべしと軽く叩く。しかし、SはKの方は振り向かず、反応もしない。<一方的—親和的—アピール>Kは②頬を軽く叩き続けながら、Sは嫌がることはなく無表情のまま、<一方的—親和的—アピール>二人は前を向いて保育者の話を聞く。保育者の話に区切りがつくと、SはKの方を向き、口を大きく開け自分の叩かれている頬を指さす。Kが、③Sの指さした頬を覗き込もうとすると、SはKが見やすいように体をKの方向へと向ける。<一方的—親和的—アピール>SとKは数秒顔を見合うが会話をしないまま、目を互いにそらした。Kはすぐに後方にいる別の友達へと体を向け会話を始めた。

SがKの身体接触に対して反応していないのに、親和的カテゴリーに分類した理由は、Sの表情は身体接触を受ける前と後で異なっており、身体接触を受けることで和らぎ安心しているように見受けられたからである。Kの身体接触に対し反応もせず、二人の間には会話もないが、SとKは互いに心を許しあっている関係であることが推測できる。この場面では二人だけのコミュニケーションが成り立っていて、暗黙のコミュニケーションとして身体接触を巧みに使っていて、身体接触を通じて二人だけの安心できる空間を共有することを穏やかに楽しんでいるといえる。この事例から、身体接触は必ずしも遊びや会話のきっかけ作りや相手の反応を期待するものではなく、身体接触により相手に“触れる”ことで安心を得たり、隣にいるという空間を相手と共有したりしていることがわかった。日常の保育の中では見落としてしまいそうな、安心できる空間の共有という形のコミュニケーションにおける身

体接触の役割を見出すことができた。

事例4 **R**：年長女兒，**A**：年長女兒

Rと**A**は普段から仲が良く、クラス内でも戸外遊びでもよく一緒に遊ぶ姿が見られる。**R**は常にリーダーシップをとり遊びを仕切っている。**A**は遊びへのこだわりは特になく仲の良い友だちに遊びの内容を合わせ、いつもにこやかに友だちとの時間を楽しんでいる。また、**R**は会話のテンポが早く、**A**はゆっくりしているため、発話量は圧倒的に**R**の方が多く、**A**は**R**に対する微笑みや相槌が多い。

集団遊びの合間の時間、**R**と**A**は手を繋ぎ隣同士に座っている。**R**は**A**の耳元で大きな声で「おーい!」「きゃー!」などと叫び、**A**はそれに対して「きゃー!」と大きな反応をしたり、笑顔で耳をふさいだりして二人でふざけあっている。すると**R**は突然**A**と繋いでいた手を放し自分の手で自分の頭を激しめになでる。すると今度は①**A**の頭をなでる。そして**A**の手を掴み、自分の頭に乗せる。突然だったので**A**は**R**の行動の意図が汲み取れず、笑顔ですぐに手を下ろす<相互的-親和的-アピール>が、**R**は**A**の頭をなで続けている。**R**は②もう一度**A**の手を掴み自分の頭の上に乗せようとするが、**A**は**R**の頭ではなく、自分の頭を触る<相互的-親和的-アピール>。**R**は「違う!」「なんで!」と笑いながら言い、③もう一度**A**の手を掴み自分の頭に乗せると、**A**はようやく**R**が頭を撫であいっこしたかったことに気が付き、笑顔で**R**の頭をなで返す。<相互的-親和的-遊び・ふざけ>数秒、互いの顔を見あいながら頭をなであうと、**R**は満足げになでることをやめた。二人はまた手を繋ぎ、楽し気に話を始めた。

①②の身体接触が成立しなかった原因は**A**に**R**の身体接触の意図が伝わっていないことと考えられる。子どもたちは日常ごく自然に“ねえねえ”などと相手の肩を触る等の身体接触をとり、相手の興味を自分に向かせアピールをしたり意思を伝えたりしているが、そこから遊びや会話に発展するか否かは相手に自分の意図が伝わるかどうかに関係する。抽出した全事例から考察すると、一方的な身体接触は相手に意図が伝わらず、会話さえ発生しない事例が多い(事例4)。また、相互的かつ親和的な身体接触は意図が伝わりや

すく意思疎通がとれるためその後遊びや会話に発展する場合が多い。例えば“Aが頬を触るとBが頬を触り返しAがBを抱っこする”“CがDに肩を組むとDは喜び、二人は肩を組んだままスキップをする”などの発展をする事例が多くあったが、今回の事例のように相互的かつ親和的な身体接触であっても、意図が相手に伝わらない場合もある。しかし、**A**は、**R**の激しい身体接触を嫌がったり拒否したりせず、③の身体接触では意図を汲み取り、**R**に応えたのはやはり普段の関係が大きく影響していると考えられる。また、今回の身体接触はすべて**R**が**A**にするものである。これは普段から遊びのリーダーシップをとる**R**と**R**の提案を受け入れるフォロワーシップを持つ**A**の関係性が読み取ることができる。普段の信頼関係の有無だけでなく、身体接触をする側と受ける側の友人関係の関係性も反応に大きく影響すると考えられる。

事例5 **Y**：年長女兒，**M**：年長女兒

Yと**M**は同じクラスで**Y**は行動が少しゆっくりの**M**のことをいつも気にかけて世話をしている。**M**は**Y**のことを嬉しそうに受け入れることもあれば、**Y**の親切を時々迷惑そうにしていることもある。それは**M**が自分でやりたいことを**Y**が勝手に手伝ってしまったり、**Y**が必要以上に「大丈夫?」と声をかけたりしてくるからである。しかし、戸外遊びで一緒に遊んだり、帰りには**M**から**Y**に挨拶をしに行ったりと、**M**は**Y**のことを慕っている姿も見られた。

Yと**M**は遊戯室に1列で前後に座っている。**Y**は突然後ろに座っている**M**の方を振り向き、①**M**の靴下を触る。**M**は少し驚いたような表情を見せ、伸ばしていた足を自分の方へ曲げ靴下が見えにくいようにする。<一方的-否定的-アピール>**Y**は**M**の顔は見ずに靴下だけをみていたから、嫌そうな表情に気が付かず、②靴下の柄をひとつずつ指さし、キャラクターの名前を言い出す。**M**は、最初は無表情で**Y**の顔をじっと見つめるが、**Y**が何回か指差しを繰り返すと**M**は**Y**から顔をそむけるように違う方向を向いた。<一方的-否定的-アピール>③**Y**はそれでも何回か繰り返すと満足したように前方を向き座った。**M**は**Y**が前を向いたのをちらっと確認すると、そむけていた顔を前に戻し、曲げていた足を伸ばした。このやりとりから**Y**と**M**が会話することはなかった。<一方的-否定的-アピール>

すべての身体接触が一方的なものであり、相手は拒否に近い否定的な反応を示した。否定的な反応をみせた原因として考えられるのは事例3のように身体接触の意図が汲み取れなかったからである。Mは前方を向いていて、突然振り向いたYが声をかけることもなく自分の靴下を触りキャラクターの名前を読み上げている状況に驚いたような表情をしていた。唐突すぎてMは状況を把握できなかったことやMの話したいタイミングではなかったことが考えられる。一方的な身体接触は、タイミングが身体接触をする側によって決まるため、受け手は驚き否定的な反応を見せることもある。一方的な身体接触は、会話を始めるひとつのきっかけにはなり得るが、このように意図が伝わりづらく、会話すら発生しないことが多い。さらに、事例5が事例4のように発展しなかった原因はおそらく二人の関係性が影響している。MとYは普段からずっと一緒にいるわけではなく、どちらかというYが一方的にMに世話を焼いているという関係のため二人の間には事例1, 2, 3のような信頼関係がなく、なおかつ一方的な身体接触だったため拒否的な反応であったと考えられる。この事例からも身体接触と信頼関係は影響しているといえる。

V. 総括と今後の課題

子どもが日常の中で行う身体接触は、行う側と受ける側の信頼関係や意思疎通が大きく関わり、それにより意味や役割が左右されることが明らかとなった。相手の存在を認識していて意思疎通がとれている相互的な身体接触は事例数が多いことから、信頼する相手と会話をしたり遊んだりする際に、必然的に、自然に身体接触を伴いながらコミュニケーションを楽しんでいると考えられる。また、一方的な身体接触は受ける側には唐突に感じられるため意図が伝わらないことが多く、否定的な反応の事例もみられたが、身体接触を会話や遊びに発展するきっかけ作りとして有効的に使っている、一方的かつ親和的な身体接触の場面も多くみられた。

さらに、身体接触をきっかけとするコミュニケーションが、必ずしも受け手の反応を期待したり、会話や遊びなどに発展したりするものだけでなく、二人だけの空間を共有することで安心を得るといった暗黙の了解があることも明らかになった。つまり、信頼しあっている関係において、身体接触は会話同様の作用があり、非言語的コミュニケーションとして成立している可能性を有することがわかった。

今回は、身体接触の種類を明らかにし、意味や役割の分析をしたが、身体接触に対して苦手意識のある子どもが、集団遊びの中で自然にとる身体接触を受け入

れて楽しめているか、身体接触に対する苦手意識に変化はあるかということについての検討はできていない。また、今回の調査は集団遊びのなかで発生する身体接触のみを対象にしたため、今後は自由遊びや保育中など様々な場面での身体接触を検討し、さらなる意味や役割を探ることを課題とする。

引用文献

- (1) 曹 美庚 (2008) スキンシップ許容度とコミュニケーション距離—日本人大学生の分析結果を中心に—, 九州大学大学院言語文化研究院
- (2) 會田樹梨他 (2014) 養護教諭の対応と子どもの安心感との関連性に関する研究—スキンシップ・タッチに着目して—, 茨城大学教育学部紀要
- (3) 塚崎京子・無藤隆 (2004) 3歳児の仲間関係における身体接触, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要
- (4) 藤田清澄 (2011) 遊びの中でみられる幼児の身体接触の意味—身体知の知見から—, 保育学研究第49巻
- (5) 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991) 子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theoryの実証的研究—, 教育心理学研究第39巻
- (6) 山田修平 (2017) 幼児の表現を広げる製作環境設定の研究(1)—シャボン玉お絵描きを題材とした2つの環境設定—, 淑徳大学短期大学部研究紀要第57号
- (7) 山田恵美 (2011) 保育における空間構成と活動の発展的相互対応—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—, 保育学研究第49巻

謝辞

研究の目的をご理解いただき取り組みにご協力いただいた関係機関のみなさまに感謝申し上げます。